

農地中間管理事業に対する担い手の声

(平成28年4月～8月)

「青年農業者連絡協議会役員の意見」H28.4.28

- 年配者で農地を貸したいという人は多いが、いい所は少ないし、地域に借り手がない。それに皆、使い勝手のいい農地ほど最後まで自分で使う。貸したいところは狭くて水の便の悪いところや、水はけの良くないところ、他人の土地を通らねば入れない畑などが多い。それに絶対貸したくないという人もいる。
- 農地を探していたら偶然、貸してもいいという人がいて借りることができた。地域の農家に話していると意外と見つかることが多い。農地を預かってもらいたい人は、農業委員などに話すより身近な人に言うので、情報は幅広く集めた方がいい。
- 有機農業でコメ作りをしているので、特に周囲の理解が必要だ。自分が農薬を使わなくても他所から流れ込んでくるので、いずれは周囲を広げていきたいが手が足りない。地主によっては畦畔に草が生えているだけでうるさく言ってくる。人を見て借りないと農地を斡旋してもらっても後が大変になる。
- 新規就農予定者は青年農業者連絡協議会の会員になるだろうし、同じ地域の会員が農地を探しているのであれば、皆に呼びかけて、貸したい農地を耳にすれば機構に提供することはいいことだ。
- 野菜や果樹では、農地を集めて規模拡大する意味がない。規模を広げて手が回らなくなれば、品質が落ちて単価は下がり、何をしているかわからなくなる。
- 担い手に農地を集めるよりも担い手の経営が成り立つような話を提供してもらいたい。
- 機構が青年農業者の意見を聞いて事業や施策に活かしてもらえらるなら、会員に呼びかけて機構の事業に協力するよう総会で決定して、連携協定を結ぶことにしたい。

「今治市波方町での意見」H28.5.11

- 野菜と米、一部果樹も植えているが、土地は借地でまだ増やしている。より良い土地を求めて、作る作物の条件に合ったところを借りてやっている。農地はいくらでもあるので、効率の良いところがあれば、借り替えていく。土地に対する執着はなく、借りる農地はこちらが選ぶ時代である。
- 相手も貸すにあたっては「畦畔の草は管理してよね」とか、「ここで作ってくれるなら、この土地もセットよ」とか色々条件が付加される。そうなると、こちらでも当然効率の良いところを優先してしまう。管理されていない土地はもうだめである。

- 四国は水が大事なので、水源の池からそれぞれの田に水が引かれている。確実に水が確保されるのは、池に一番近い田である。一番近い所というのは山中で車も入らないような田だが、水の便だけは良いので、そこを生かせればよいのだが。
- いずれ人はいなくなる。今も農地は淘汰されていて、効率の良い土地だけが残ってきている。農地のことよりも、今やるべきは農業をやれる形を作ること。とりわけ、労働支援の仕組みづくりが大事である。今度、人材派遣会社と農協が提携して農業応援隊事業を開始する。

「柑橘生産の青年農業者の意見」 H28. 6. 30

- 愛南町は台風が多いので、病気になりにくい“河内晩柑”が中心になっている。園地の傾斜は、比較的緩やかだが、基盤整備が遅れていて幹線道から園地までの道が未舗装である。雨が降ると人も車も泥だらけ。小規模な基盤整備ができればいい。現在、2haほどで栽培している。経営規模を広げるには労働力がいるが、常時人を雇うほどの収益は上がらないので考えていない。
- 昔は良かった、儲かったという話を聞くが、自分たちはドン底の時代から始めたので良かった時代のことを知らない。だから、始めた頃よりは良くなっていると思っている。
- 地域には、栽培をやめた農地でも他人には絶対貸さないという農家もいる。注意されると少し手は入れるが作っている様子はない。誰が何を言っても無理な人がいる。園地は余っているが広げるつもりはない。
- 宇和島市吉田町では、安定した技術があって、収量もとれるので後継者は増えてきている。中生の温州が中心になるのは、長く樹に置いていて味がのるから。西宇和は早生が中心だが、この土地は中生に向いている。
- 共選を利用する人と個選の人がいて、儲かるのは個選。最近共撰でも低い品質だと評価点が低く、いいものは高い。品質に応じた値段になっている。量がなければ販売は難しいので共撰は重要だ。園地は急傾斜だが、どこも同じなのでこんなものだと思っている。ただ、違ったことをすると周りがアレコレと言ってくる。いい園地は借りてもいいが、借りた後でアレコレを出されるので考えものだ。
- いろいろな柑橘品種があって労働力の配分ができるのはいいが、少しずつ作るので出荷量がまとまらない。産地としては品種を絞る必要がある。
- 高齢農家は作っても「収穫できないから採ってくれ、実もあげる」という。収穫せずに残していたら、翌年、実がならないから。でも、翌年も収穫を頼まれて実はいらないという。
- 耕作放棄地をまとまって整備しても実が採れるのは10年先。柑橘は育成期間の方が成園よりも手がかかる。育成中は毎日、見回らねばならないが成園なら1ヶ月に1度でもいい。育成中に失敗したらすべてがダメになる。だから、園地の一部を少しずつ改植している。今の園地で十分である。

「四国中央市での意見」 H28. 7. 4

- 当初、「機構ができれば耕作放棄地を預けて管理してくれる」という報道があったので、それは有り難いことだと思った。これで県下の耕作放棄地は、すべて解消されるだろうと皆さんが期待した。この地域だけでも1千ヘクタールの遊休農地があって大変なのだが、それがすべて解消されるという期待があった。それに耕作の難しい所は、機構が全額負担して基盤整備したうえ、担い手へ渡してくれるという話も聞いた。それらはいつのまにか消えてしまった。期待と現実にギャップがあって、動けなくなった。市町の職員は人・農地プランや機構についても説明会を持ったりして、農地の集積を凶ろうとしているが、誰も動かない。
- 都会に出た人がいて、当地には親も死んで兄弟もいない。帰って農業をする気もない。いわゆる土地持ち非農家だ。それに都会で住んでいる人は、田舎の農地の値段の安さなど分からない。放棄されて農業委員会が通知を出すとシルバー人材センターに管理を依頼するが、年間に8万円から9万円かかるようになる。すると市に寄付したいと言う。でも市はそんな寄付を受けることができない。農村には農地の出し手はいても借り手がいない。
- そもそも農地の面積が小さく分散しているうえ、コンクリ畦畔を整備していて集積自体ができない。主業の人は150枚から200枚の農地を預かっているが、どこを借りたのかも分からなくなっている。水を入れに行行って止めるのを忘れ、一帯を水浸しにして怒られるといったことも起こっている。「あの人の土地を借りて耕作しているのに、なぜ自分の土地は預かってくれないのか」と言われ、断り切れずに借りてきた結果である。
- 機構には、まず農地を受けられる担い手を確保するために知恵を出してもらいたい。それを実践するのは農協であり農家である。

「愛南町での意見」 H28. 8. 23

- 作っているのはほとんど“河内晩柑”で、経営面積は借地10haと所有地3haである。3月から8月まで収穫が続くので、作業が一時期に集中しないから労働が平準化している。だから若い人を常勤で11人雇用している。雇用が可能になって規模拡大ができた。
- この地域は、台風が多いのと土質のせいか“河内晩柑”以外の種類は適さない。今はまだ労働力が足りないので「園地を借りてくれ」と言われてもお断わりしている。温州みかんなら収穫と出荷が11月中旬から12月一杯に集中するので、その時期だけ人手が必要である。西宇和あたりなら5,000人は必要だろう。最近では、みかん摘みのおばさん達が年を取って辞めてしまうので収穫できずに栽培をやめる農家が増えている。
- 地域の人「あそこの園地は利益が上がるが、ここは上がらない」ということを知っている。良い樹が植わっていて条件の良い園地なら、賃料が10a当たり5万円から7万円する。そうした所を借りるには、地主は少しでも高い方がいいか

ら競争だ。ただ、そうした園地はめったに無くて、ほとんどの園地は誰も借りないのが現状である。

- 「“河内晩柑”は土地を選ばない」と思われているが、実際は違う。今年も標高100m以上は、果実が凍って全部ダメになった。低地には霜があつて高地では寒波がある。南向きは台風でダメになる。だから、たとえ西向きでもおいしい実がとれる園地なら確保しておく。経営を成り立たせるにはバランスが必要である。
- 水田の多くは基盤整備されているが、受け手がいなくて荒れ始めている。農地を預かっている若い連中は「返せるものなら返したい」と言ってくるで、「いずれは出来なくなるのだから無理することはない」と話している。東北や北陸なら、経済的にコメ作りは残るのだろうと思うが、中山間地域では考えものである。水田を守ろうとするのはいいが、ある意味、罰ゲームである。農地を引き受けたものが損をしている。